
Message In Dream

櫻姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Message In Dream

【Zコード】

N4113C

【作者名】

櫻姫

【あらすじ】

あなたは夢を見たことがありますか？その夢はあなたになにか伝えていましたか？例えば、運命の人の暗示とか・・・それはそんな夢の話。

『待つて、待つてって！！
お姉さん、もう、限界。
少し、休もう?
ねつ、お願ひ。』

いつたい、じじはどじ？
どのくらい、走つたのだろう？

景色は何も変わらない。

いや、何も見えない。
暗くてではない。

光が眩し過ぎて、辛うじて見えるのは、私をどこかに連れてこよう
としている少女だけ……

今まで、白いワンピースを着て、長い黒髪をなびかせて、私の前を
走っていた少女が、私の声を聞いた途端、ピタリと立ち止まつた。
しばらくの間、その少女は全く動かなかつた。
周りは静寂に包まれていた。

冷たく、全てを無にしそうな空氣だった。

私は耐え切れなくなり、少女に話しかけようとしたその時、少女が
私の方を振り向いた。
眩しそぎる光のせいで、少女の姿がぼんやりしか見えない……
何か話しているみたいだけど、声が聞こえない。

『聞こえないから、もう一回、始めから言つて?』少女は私を無視して、何かをまだ、話し続ける。

やっぱり聞こえない . . .

この子は私にいつたい、何を伝えたいの?

だから、分からぬの!

聞こえないの!!

少女はよつやく話しあわつたみたいで、周りがまた、静寂に包まれた。

その数秒後、冷たい空気が、急にふあつと優しい、暖かい空気に変わった。

私は驚いて少女の方を見ると、少女は微笑んでいるようだつた。

とても優しく、暖かく、全てを受け入れてくれるかのような笑顔で、微笑んでいるような気がした。

そう、まさに今、私を取り巻く空気と同じように . . .

そして、私の目から、自然に涙が零れていた。

どのくらい、じうしていただろう . . .

涙がようやく止まった。

少女がいた所を見たら、もう少女がいなかつた。

しかし、その場所には違う誰か、男の人らしき人がいた。

『誰 . . . ? 女の子、見ませんでしたか?』

私がそう聞いた時、周りの空気がまた、変化した。

さつきまでの暖かさ、優しさと更に、今までにないくらいの懐かしさ、愛おしさを感じた。

私の目からは、ダムが決壊したかのように、涙が溢れ出て來ていた。

あなたは誰 . . . ?
誰なの . . . ?

ジリリリリ

パチ . .

またか . .

この頃、この夢を頻繁に見る。

小さい頃から、この夢を見ていた。

だけど、一年に一回くらいのペース。

でもここ最近、一ヶ月前くらいから、毎日のように見る . . .

いつも同じ所で終わる。

小さい頃から誰か知りたいのに、分からぬまま . . .

何かがひっかかる . . .

「深雪、起きてるの？遅刻するわよ！」

私は階段の下から呼ぶママの声で、ハツと我に返った。

時計を見ると、あと10分で家を出なれば、完璧に遅刻である。

私は慌てて用意をして、家を出た。

家を出て走っていて、家の近くの公園に差し掛かった時、私は急いでいたはずなのに、足を止めてしまった。

いつもは普通に通り過ぎるので、今日は出来なかつた . . .

だって、その公園のブランコに……
あの夢の少女がいると思つたから……

ブランコに乗つてゐる少女は、夢の少女とは姿は全く違つ。
その子は髪は黒髪のショートで、花柄のワンピースを着ていた。
全く姿は違つけど、絶対に夢の少女だ。
だって、雰囲気が同じだから……
何回も夢で会つてゐるから、間違えるはずがない。

その子は、二つの間にか、固まつてゐる私の前にいた。

「ど、どうしたの？」

その子は答える代わりに、微笑み、そして私の前から走り去り始めた。
私は自然にその子を追いかけ始めていた。

どのくらい、走つたのだろう……
無我夢中にその子を追いかけついて、気付いたら、見たこともない
草原が広がつていた。
やばい……
疲れて來た……
その子はどんどんと遠ざかっていく……
追いつけない……
もう、叫んでも聞こえない距離にいる……
も、もう、ダメ……

私はとうとう限界に達し、座り込んでしまつた。

私の視界には、あの子はもういない・・・。

周りを見ると、草原がただ広がっていて、数百メートル先に大きな木が一本あつた。

私、家に帰れないよ。

携帯は圈外だし・・・

ここ、どこなんだろう・・・

どうしよう・・・

人がいる気配もない。

私、この草原にただ一人、取り残されちゃった・・・

私はあの子を追い掛けたことに後悔をし始めていた。

とりあえず私は、最後の気力を振り絞り、大きな木を目指して歩き始めた。

目立つ場所にいれば、誰かが発見してくれるかも知れない・・・

私は、大きな木に最後の望みをかけた。

だんだんと近づいて行き、残り200メートルくらいで、その木の下に人影が見えた。

幹に寄り掛かり、絵を描いているみたいだった。

その人は、私に気付いていない。

私は人がいることに嬉しくなり、足を速めた。

何か強力な物に引き寄せられているように、自分の足は今すぐにでも走り出しそうなくらいの速さで、その人の方へと向かっていた。

そして、その人に近づいていくほど、胸騒ぎがどんどんと大きくなつていった。

その人まで残り50メートルの時点で、私は立ち止まつた。

その人が私に気付き、微笑んだからだ。

その人が微笑んだ瞬間、私のからだに電撃が走った。

そして、私の目からは自然に涙が出ていた。

間違いない、絶対に . . .
この人だ、この人が . . .
愛しい、ものすく愛しい . . .

私は涙を止めるにも、歩くとも出来ずに、ただ立ち止まり泣いていた。

すると、その人は立ち上がり、私の方に歩いて来た。
その人が近づいてくれば来るほど、私の胸は高なり、涙が溢れ出た。
その人は、私の前で止まった。

「キミだよね？いつも夢で会つのは . . . 違う？」

私はその人の質問に、頷いて答えるのが精一杯だった。

この人が . . .

こんなにも、こんなにも愛おしいと思ったのは初めて . . .

「会いたかった。あの女の子が、キミみたいな人でよかつた . . .

」

その人は、泣いている私を力強く抱きしめた。

「これから . . .

ハチ

夢か

久しぶりに見たかも

いいところで思覚めしかたなるから

卷之三

それにしても

あの人、すごくそつくりだつたな。

私は、隣で寝ている愛しい人の顔を見た。

「さあ、この人が運命の人で間違いたい」とことを教えてくれたこちがいなー。

そしてやつと、あの櫻に出て来る少女は・・・。

私はお腹を触つた。

今私たちの一一番大切な命よりも大切なお腹を

וְמִתְּבָרֵךְ תַּהֲנֵל אֶת־בָּנֶךָ וְאֶת־בָּנָתֶךָ

起きてきたが、一の夢の話をじてあざけり。

そして、IJの子が産まれて大きくなつたら、IJの夢の話を書いてあげよ。

雲がない快晴の青空に、私は誓つた。

(後書き)

思いつきで書いたので、つたない文章で、起承転結がきちんとなりたっていないかもせんが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます。感謝致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4113c/>

Message In Dream

2010年10月12日07時15分発行